

俳句

12月19日(土)
高知城周辺

合田 青幹

煤逃げも兼ねし十人納め句座
パーカーの筆圧愉し年賀書く

吉本 伸秋

躍り口障子明るし冬紅葉

さわかづら逃げ易き日を搦めをり

小笠原さちを

千大根甘藷並べ市を守る

ちぎれ飛ぶ枯木にかかる雲の列

1月16日(土)

五台山

合田 青幹

悴かめる指の叶はぬ釘穴

一の門二の門注連の新しき

吉本 伸秋

梅一輪力みなざる寒の入り

一時雨ありしばかりの葱の艶

小笠原さちを

石路の絮混々山は呆けをり

凍て空へ鐘の余韻の遠さかる

短歌

危機感

山本晶子

イスラム国誕生の源はイラク戦争
パリ同時テロに心は沈む

アメリカに追隨してゆく日本の
行く末危ぶむパリ同時テロ

「政権の意向付度」テレビ界に
漂う空気に募る危機感

追悼野坂昭如氏

榊原忠彦

去年逝きし節子、俊輔ら多かれど
中でも異色昭如、忘れ得ぬ人

(野坂昭如氏八十五歳で十二月十九日没)

「七転び八起き」を毎日愛読す
「火垂るの墓」を想ふも悲し

(上の句のエッセイは毎日新聞に長く
連載された)

最終刊「マスコミ漂流記」は昭和
人生のカーテンコールとも言ふべ
きか

「こうたいきょう」36号特集
「わたしと高退協」を読む
叶岡淑子

高退協と歩みし人生に悔いなしと
高らかに告ぐ昌俊先生

戦時下の歌の数かず記憶せる清恵
先生の平和への思い

記念号の一巻に襟正し歴史を紡
ぐ一人でありたし

川柳

戦後七十年そして新春(年)

小澤 幸泉

わたつみの声が消えない七十年
戦さ雲平和な街をつつみ込む

安倍さんの居場所安全地帯です

貧しさと戦さの残る「昭和の日」

初日記神に生きると申し上げ

初東風や転げるように街歩く

幾度か歳を重ねし初景色

「崩壊」に向かう
の国の「社会保障」

別役 美佐

「憲法25条の会」の主催で
「高齢期を中心とする社会保
障と政策課題・地域課題」に
ついての学習会が2月13日に
県立大学で実施されました。

春の嵐となったこの日は、会
の開催も危ぶまれましたが、
22名の参加がありました。講
師の田中きよむ先生からは、
詳細な資料が配布され、近年
の社会保障に関しての改革の
方向が詳しく説明されました。

特に、住民相互の助け合いの
重要性を認識し、自助・自立
のための環境整備等の推進を
図るとして示された社会保障
プログラム法の介護に関する
分野では、★前期高齢者から

利用料は2割に見直し(2017年までに法案提出) ★軽度者への生活援助の原則自己負担化(2017年までに法案提出) ★福祉用具貸与・住宅改修の原則自己負担化(2017年までに法案提出) ★要介護1・2の通所介護等について地域支援事業への移行等が話されました。国が責任をもつのが、「社会保障」の原則であるはずが、「保障」という言葉は、死語となり、「破壊」「崩壊」と置き換えて聞く方がいいのではないかと思われる内容です。また、医療に関しても、★入院給食費の引き上げ(1食280円から、2016年度は、360円へ。18年度は460円) ★紹介状なしの大病院受診は、初診時5000円以上徴収(2016年度) ★「地域医療構想」による病床削減・再編(2016年度末まで) ★後期高齢者の1割負担(一般所得者) ↓2割(2019年度) ★後期高齢者の保険料軽減特例の廃止(2017年度) 等々、年金においてもしかり、「社会保障崩壊」へと向かっています。まさに、肅々と進められているこの政策。「怒り」を乗り越し、「激昂」へと流れています。

「取り戻そう
確かな
『社会
保障』
を！」



いつだったか、高知城ホールのロビー展示場で、窪田充治先生から高退協へのお誘いを受け加入させていただいた。

山原健二郎先生の本も何冊かお手伝いした。その一冊「満天の星」<150余名の捧げた弔辞集>。呼ばれてご自宅にお伺いしたとき「余命6か月」の宣告をうけ何か月か経っていた。「これを一冊にしておかないと死んでも死にきれません」と段ボール箱に2箱

の弔辞が。その時、半紙の書をごくださった。後日すぐ「まえがき」を受け取り、表紙はいただいた書の「満天の星」の文字を使用了解をいただく。初校を後へ、訂正がはじまらぬ。先生の見事な申し送り、刊行委員会、企画はなかつた。各々の写真まで手配してくださった。先生も大満足でしょう。本作りで、益々山原先生の偉大さを感じ、月一回で「山原資料室」の当番を

しんでいる。そして、平和資料館・草の家初代館長西森茂夫先生の著書も何冊かお手伝いした。永年幻の原稿とかわれていた横村浩の「日本詩歌史」が上梓されたとき「これを出したい本は出せた」と言われた。週一日、草の家へ。これも愉しみに出かけている。

一生懸命の本づくり
のいぬ会をいただきます

西村 多津子
とても 趣味悠々とはいえませんが...

伊野商業高校の事務室に文字配列「いろは」の和文タイプがあった。PTA会計(県費外職員)の私は8年勤務した。その間首切りが発生し、県費外組合に加入した。校長、PTA会長との回交など、いつも高等教組の先生にお世話になった。母と同居の条件は「こどもが保育園に入るまで」。随分助けてもらった母との期限が目前のころ、Y女史に「知人が写植(写真植字)をはじめたがやってみ」と声をかけてもらい、家で文字入力することになった。職場は発展

趣味悠々

して「会社」になり、会社方針の一部門として「自分史」に取り組むことになり、一番年長者の私はこの部門をひきうけることにした。遅読の私は懸命だった。書き上げれば本にしたい。本のページの文字の組版はどうしたら読みやすいか等々。思えば30年経っていた。100冊位の本づくりのお手伝いをして頂いた気がする。仕事とはいえ、貴重な年月であったと思う。